

# 垣間見たバルト東欧

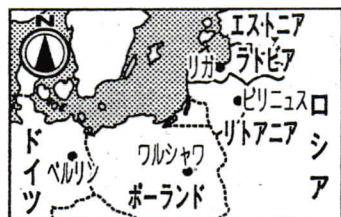
<上>

去る三月下旬、学会の合間に市場経済への転換ぶりを垣間みようと、ベルリン、ワルシャワ、ビリニユス、リガの素顔を探ってみた。旧ポーランド共産党の白亜の殿堂は、今は主も取引所と銀行にかわり、屋上には「リコー」の巨大な広告塔を頂いている。リガ市民の足である市電も「マルボロ」や「キヤノン」の派手な絵や文字を身にまとい、ており、こうして街のたまたまには、度肝を抜くような華麗な変身がうかがえる。だが、ワレサの盟友のマソビエツキ元首相は、学会での挨拶で、市場経済への移行には、庶民がどうしても越えねばならない「涙の谷」があるといった。それほどんな谷なのか?

中央駅前の目抜き通りを東に二十分ほど歩くとヒェスラ河

## 青空市場

粉塵に覆われ、何やら向こう岸の小高い丘で大勢がうごめいている。まっ朝七時前なのに、幅一きもある橋を渡ってみると、丘とは実は高く土



佐々木 洋

## 隣国から次々と担ぎ屋

盛りされた競技場の観客席の頂上外周部であり、対岸から眺めたものも、競技場前の広場や、中腹部の通路に店を出せなかった人々が、大きなバッグやリュックサックを担いで頂上に登りつめ、その通路に次々と露店を設営している光景であった。国立競技場はまさに空前の規模の青空市場

となったのである。リトアニアのビリニユスや、ラトビアのリガでは、駅の脇に大きな青空市場があった。これも売り手・買い手でこた返している。だが、青空市場の存在自体が珍しい訳ではない。旧体制下でも、公設市場の周囲は、個人菜園産の生鮮品類の自由市場で賑わっていた。



担ぎ屋が持ちこんだバターやソーセージが並んだビリニユスの青空市場 (筆者撮影)

## 市民と物々交換

## マフィアの影も

々交換を目的に思い思いの売りの物を持つ市内や近郊の老若男女の登場である。試みに、ビリニユスやリガで山と積まれたソーセージなどの酪農品の中には、ウクライナ産のものが目立ったが、その運び手にはベラルーシの担ぎ屋が多いのだと聞いた。旧ソ連の解体後、それぞれ独自通貨をもつに至った諸国の間では、生産性、豊凶、インフレ、為替レート、集団農場の崩壊などの度合いの相対比の変動によつて、ある品でウクライナ産が、また別の品でベラルーシ産が安上がりになると、担ぎ屋がその仕入れに当該国に殺到し、逆に彼らはその国で比較的高く売れる品を、より安い隣国から担ぎ込む訳である。

ただし、青空市場の、この担ぎ屋の活躍する市場の様相をカメラに収めるのは難しい。たとえ撮りたいと思うアングルの人々が友好的に対応してくれそうな場面でも、いつの間にかマフィアまがいのグループが接近してきて、フィルムを抜き取ろうとしたり、空手を使えることを誇示したりする。バルト諸国では日本人を見かける機会はまた少ないらしく、組み手の素振りをして見せた中央アジア系の青年も、私に「お前はキタイ(中国)なのか」と聞いた。(札幌学院大経済学部教授)



# 垣間見たバルト東欧

佐々木 洋

## 性急な移行で危機的状況

青空市場での、もう一方の新たな主役たちは、食器でもセーターでも、不要不急で売れそうな品々を自宅から持ち出して立っている。自家製の黒パンを南京袋から覗(のぞ)かせ、あるいは揚げパンやローストチキンを集乳缶のような入れ物から小出しにする農婦も少なくない。外してきた電話器やダイナモなどを足元に置いて腕組みをする売り手もいる。そこにはまた、何処で仕入れたのか、僅(わず)かの煙草をバラ売りする老女も混じっている。こうして例えばヒリニユスの駅から青空市場までの沿道で、それぞれの売り物

に日毎の生活に疲れた人々である。

### 市場経済

実は現在、東欧の市場経済移行の困難が最も集約的に現れているのがリトアニアであり、昨年秋の総選挙と、今年一月の大統領選挙で旧独立共産党系の民主労働党が圧勝した背景もそこにあった。

日々のパン不足が漸(よう)やく解消した一九七〇年代以降に、農業がアレクシス腫(は)れの旧ソ連が、曲がりなりに畜産の振興を通じて国民の不満を抑えてきたのは、輸出原油の突然の値上がりで、飼料穀物の大量輸入が可能になったからである。だが、ロシアの西方には穀物を輸入できる不凍港はない。旧ソ連の欧州部で唯一の不凍の良港クラ



ヤッケやスプーンなど思い思いの品を持って売り手が集まるラトビアの首都リガの青空市場 (筆者撮影)

格での原油やその他資源の供給を拒んだ。これに対して、急進改革派のランスベルギス政権が打ち出したのが、価格自由化、集団農場農民の自作農民化、国営企業の民営化などの一挙実現を目指す、経済活動の新しい受け皿を欠い

## インフレと失業 干ばつ追いうち

格での原油やその他資源の供給を拒んだ。これに対して、急進改革派のランスベルギス政権が打ち出したのが、価格自由化、集団農場農民の自作農民化、国営企業の民営化などの一挙実現を目指す、経済活動の新しい受け皿を欠い

効かない機械化の論理で、気象変動にもろい春作物への転換を強いられてきた。一九八〇年代半ば以降の原油価格の低迷は旧ソ連の外貨事情を悪化させ、輸入飼料依存のリトアニアの畜産も窮地に陥った。しかもバルト三国の独立を先導してきた新生リトアニアに、ロシアは割安価のない春作物体系の弱さを露呈したリトアニアは、目下、国連とECとの緊急援助によって辛くも飢餓を免れていると、回国農業省のビツテ国際関係部長は訴える。それだけではない。輸入穀物の途絶と凶作でと畜を強いられる家畜を、原油と現物交換したいという提案もロシア側に断られた。貯蔵施設の乏しい同国は、結局、飼料不足で処分した大量の家畜をみすみす焼却する羽目に陥った。その無念は人々の胸にくすぶり続けており、こうした呪のろい煙が晴れぬうちは「涙の谷」の彼岸も見透し難い。

(札幌学院大経済学部教授)